

# 令和4年度 静岡大学教育学部附属静岡中学校 学校評価書

## 学校教育目標

「よりよいものを求めて こだわり 高め合う生徒」

## 静岡大学中期計画（附属学校園関連部分）

附属学校園と大学・教育学部及び地域の教育界・産業界等との連携協力を強化し、先導的・実験的な教育研究を通してグローバル化、理数教育に対する地域のニーズに基づく人材養成に取り組む。  
 附属学校園と大学・教育学部との連携の下で、教育実習及び実践的な教職科目の充実・強化に取り組み、より高い資質を備えた教員養成・研修に貢献する。  
 附属学校園と地域の教育委員会・学校園等との協力の下で、地域の教育モデル校として、知識の活用、協調学習の推進等の今日の教育課題に対応した取組を行う。

項目	目標・取組	評価指標	自己評価	診断・分析	学校関係者評価
学校経営	自己を磨き 他とともに高め合うことのできる資質・能力を育む学校づくり	・校訓「真善美」「自主独立」や学校教育目標を基盤とした学校生活の充実を図る。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「学校生活が楽しい」(概ねも含む)と感じている生徒は94%。</li> <li>・「校訓を意識した活動」(概ねも含む)について、生徒の評価は93%、保護者の評価は91%。</li> <li>・「授業で仲間と学ぶことで自分の考えが深まったり広がったりしていく」(概ねも含む)について、生徒の評価は94%。</li> <li>・「行事等を通して、仲間と充実した学校生活を送れている」(概ねも含む)について、生徒の評価は92%。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業参観や教育協議会における生徒の様子から、課題に対して深く考える姿が見られた。</li> <li>・附属学校の生徒は「受検して」入ってくる。学校方針を明確に示すとともに、時代の流れも意識した教育を実践してほしい。</li> </ul>
		・主体的な人間を育む、特色ある教育活動の実施に向けて、生徒自らが、教科の本質を協同的に学ぶ授業の実践及び生徒の主体性を尊重した特別活動の実践を行う。	A		
		・生徒の自主的自治活動を育むため、生徒会活動を中心とした活動を支援していく。	B		
	誰もが安心して生活できる学校づくり	・特別な配慮が必要な生徒への支援を充実させる。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報発信については、HPへの掲載やメール配信等を積極的に活用することで、「必要な情報が伝わっている」と回答した保護者が96%であった。</li> <li>・校務委員会や生徒指導委員会において、特別な配慮が必要な生徒に関する情報を共有し、支援の具体策を協議している。本年度よりSSWを学校で手配し、配置したことで、生徒指導上の諸課題への対応に関するより専門的な知見を得られるようになり、組織としての対応力が向上した。</li> <li>・「いじめのない学校生活づくり」を意識した生徒は91%。これについては100%を目指したい。</li> <li>・安全点検を毎月確実にを行い、修繕が必要な危険箇所については直ちに対応した。大きなものとしては、「金属探知機による運動場の安全点検」「旧テニスコートの整地」「校舎内外の不要物の処分」「生徒昇降口天井の工事」「階段破損箇所の修繕」等を行った。</li> <li>・迅速な対応が難しい箇所については「使用禁止」等の表示を掲示し、生徒への注意喚起を図った。</li> <li>・警察等、諸機関との情報交換を定期的に行った。</li> <li>・「コロナ禍」に慣れてきた生徒に対して、引き続き「基本的な感染症対策」を徹底させていく必要がある。</li> <li>・図書館に係る業務軽減のため、システム管理ソフトを購入し、利用を開始した。また、保護者に協力を依頼し、図書館ボランティアを定期的に行った。今後は、図書館利用者数をさらに増加させていきたい。</li> <li>・年度途中で複数回、校長、教頭、事務で修繕の必要な箇所や予算の執行状況等を協議し、優先順位を決めて必要な物品を購入した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報伝達に関しては、紙媒体よりもメール配信の方を好む保護者が多いことから、今後、徐々にメールへと移行していくのもよいのではないかと。</li> <li>・特別な配慮が必要な生徒への支援体制を充実させていることは評価できる。ただし、それが生徒や保護者に広く周知されていたかどうかという点においては課題が残る。</li> <li>・いじめ対応については、常に危機意識をもって未然防止に努め、発生時には迅速かつ的確に対応してもらいたい。必要に応じて、外部機関と積極的に連携することも視野に入れるべき。</li> <li>・校内環境が整備されつつあることはわかるが、まだ気になる部分はある。校舎内だけでなく、校舎外についても気になる部分は手を入れてもらいたい。</li> <li>・生徒の「命を守る」という観点から、行事の時期については見直す必要がある。</li> </ul>
		・学校HPや学年だより、電話等による、保護者への情報提供を迅速かつ積極的に行う。	A		
		・校務委員会及び生徒指導委員会(毎週実施)における情報交換及び方策の検討を行う。	A		
		・いじめ防止に向け、道徳・学級活動の充実及び定期的なアンケートを実施し確実に対応する。	A		
		・いじめ案件は、いじめ対策組織で対応する。	A		
		・毎月の安全点検の実施(校舎内外)を行う。	A		
		・普通教室の施設をする。	A		
・校内安全点検マニュアルに関する研修会を実施する。	A				
・警察や外部機関との緊密な連携を図り諸問題の可決を行う。	A				
大学・附属学校園との連携や地域との連携による教員の資質向上と生徒の未来に生きる力を育成	・新型コロナウイルス感染症対策のための「新しい学校生活スタイル」の実践及び感染対策の確実な実施を行う。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SSTプログラム共同研究・授業を実施した(小林先生)。</li> <li>・言語と教科研究の協力・授業を実施した(坂口先生)。</li> <li>・『総合的な学習の時間(3年生)』において、教育学部の先生、院生を講師とした講義を実施した(7講座142名)。</li> <li>・理科の授業において、教育学部雪田准教授による『アフリカツメガエルの解剖実習』を実施した(2クラス 計2回72名)。</li> <li>・美術の授業において、カモ井加工紙(株)と連携し、『マスキングテープを用いた授業』を実施した(142名)。</li> <li>・『総合的な学習の時間(2年生)』において、金属加工アーティスト、マダラマンジ氏による講話を実施した(1回20名)。</li> <li>・STEM教育研究会会場提供(熊野・郡司先生他 3回60名)。</li> <li>・志太地区子ども理科教室講師(6回30名)。</li> <li>・大学の教育実践センター紀要執筆(英語、保健体育、学校保健)。</li> <li>・その他、オンライン等を活用した諸機関との連携を実施した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学教員や外部講師を積極的に招くことが、生徒に「本物」を味わわせる貴重な機会となっている。附属学校の強みとして、今後も積極的に推進してほしい。</li> <li>・総合的な学習で、生徒の目が「地域」に向いているのはよいことである。今後は一歩進んで、生徒が参加する「地域貢献」の在り方について、考えていく必要がある。</li> </ul>	
	・学校図書館の更なる充実(書籍・環境等)を行う。	A			
	・図書館ボランティア(保護者)による図書館の更なる整備を行う。	A			
時代に対応するための学校組織の変革	・学校予算を適正に執行し、生徒が安心・安全に過ごせる学習環境の整備を図る。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎週金曜日に情報・教育戦略部会を実施し、学習用iPadの使用に関する規定や諸課題への対応、教員のICT研修に関する内容などについて協議し、職員への周知を図った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報(ICT)面だけでなく、戦略(広報)面についても、より力を入れたとよい。</li> </ul>	
	・静岡市立小中学校教員へ教科指導法及び授業案作成の助言を行う。	B			
静岡市教育センター及び静岡市立学校との研修交流等の実施	・市内中学校との研修交流を実施する。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・可能な限り、静岡市教委主催の研修会に職員を派遣するとともに、複数の教科では市内中学校との交流を行った。</li> <li>・城内中学校、道徳授業の参観(1回)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・附属中の職員が「参加する」だけでなく、助言したり成果を広めたりする機会があるとよい。</li> </ul>	
	・会議の効率化と執務時間の確保を行う。	A			
働き方改革の推進による、教職員にとって働きがいのある学校づくりの推進	・職員一人一人の学校運営への参画意識の向上を図る。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・会議の際には、常に終了予定時刻を明示した。また、協議内容が多く、時間内の会議終了が難しい時には、別日の打合せや掲示板(Teams)を効果的に利用するなど、拘束時間の短縮を目指した。</li> <li>・アンケート集計等にはGoogleフォームを利用し、職員の業務削減に取り組んだ。</li> <li>・(努力はしているが)退職時刻の遅い職員もいるため、労働条件の改善につけて、大学に働きかけていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・働き方改革の対処方法が具体的に、勤務時間短縮につながっている部分の評価できる。</li> <li>・労働条件の改善については、教員が「働きたい」と感じる附属中を目指して、引き続き大学に働きかけてもらいたい。</li> </ul>	
	・ICTを用いた作業の効率化を推進する。	B			
教育学部との連携協力を強化し、地域の教育界に貢献できるような先導的・実験的な教育研究を推進	・教育学部の共同研究者と連携し、外部の識者等に助言をいただきながら、新学習指導要領の目指す先導的な教育研究を実践する。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究主題「学びの自覚」(本年は3年目)に基づいた授業研究を全教科で実践した。那須先生(上智大学)村山先生(静岡大学)や教育政策研究所の調査官2名をはじめ、県教委・市教委の指導主事、公立学校の先生方、大学の先生方、静岡小の先生方等に参観・協議していただいた(約300名)。村山先生には、本研究の今後の方向性や課題等について、機会あるごとに助言をいただいた。</li> <li>・研究協議会や群研授業等の研究成果を研究紀要にまとめ、全国の附属中学校、県内教育機関・中学校等に配付予定(約430ヶ所)。</li> <li>・福島市教育委員会の依頼により、授業視察及び事後研修会の実施を受け入れた(10名)。</li> <li>・熊野先生と理科共同研究(STEMアカデミー等)を実施した。</li> <li>・参集型やZoom等を活用した自主的教科研究会を実施した(数学8回80名、理科10回100名、美術2回16名)。</li> <li>・清水第七中学校との交流研修を継続した。</li> <li>・城内中学校との交流研修を開始した。</li> <li>・県外教育機関等の視察、研修会への参加を実施した(7名)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍の中でも、参集型の研究協議会を開催したことで、子どもたちの学ぶ姿や附属中の提案する授業を多くの方に見ていただいたのはよかった。</li> <li>・外部の方に発信する授業としては、学びの多様性を認めながら、終末に向けてどう包括していくかという点が課題である。全て生徒任せではなく、授業者としての意図をしっかりともちたい。</li> <li>・研究協議会以外でも、日常的に大学教員と連携する機会があるとさらによい。</li> </ul>	
	・教育研究協議会や研究紀要の配付・公開等を通して、研究の成果を広く発信する。	A			
	・先進講話や自主的教科研究会、全校研究授業・群研研究授業の地域公立校への公開等を通して、本校の取組を発信する。	B			
	・出身地教委との交流研修の実施、静岡市教委研修会への参加等により、地域との協働を推進する。	A			
	・各教科等において大学教員と連携して教育研究を推進し、論文等で成果を発表をする。	B			
	・可能な限り他校の研修会に参加し、自校の研修を俯瞰したり、研究成果を発信したりする。	A			
	・出身地教委との交流研修の実施、静岡市教委研修会への参加等により、地域との協働を推進する。	A			
教育学部との連携協力を強化し、地域の教育界に貢献できるような先導的・実験的な教育研究を推進する。	・学部生に対する教育実習を通して教職への高い意欲と教員の魅力を伝える。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・【教職大学院基盤実習】6月2日(木)～9月16日(金)のうち6日間実施し、7名の学生を指導した。</li> <li>・【教育実習Ⅱ】5月9日(月)～27日(金)の3週間実施し、38名の学生を指導した。</li> <li>・【教育実習Ⅲ】8月29日(月)～9月9日(金)の2週間実施し、28名の学生を指導した。</li> <li>・【養護実習Ⅰ】を7月4日(月)～7月8日(金)に5日間実施し、2名の学生を指導した。</li> <li>・【教育実習事前指導研修】4名の教員が大学で指導にあたった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍においても通常通りの実習を実施できたのは、「未来の教師を育む」という点においてよかった。</li> <li>・養護実習や基盤実習等、新たに加わった実習については、そのねらいや実施の具体について、大学との間で十分に共通理解を図っておく必要がある。</li> </ul>	
	・教育実習における教職キャリア形成プログラム全体を見通した効果的な実習や講義を提供する。	A			
	・教職大学院実習において、より高度な実践経験の場を提供し、高い資質・能力を備えた教員養成に貢献する。	B			

## 学校評価総括

今年度はコロナ禍の中でも、感染症対策をしながら、極力通常の実践活動を実施した。生徒相互及び生徒と教師が緊密に連携し、規模や内容に工夫をしながら行った行事や活動の効果は高く、保護者等からも一定の評価を得られたと考えている。また、生徒が安心・安全に学校生活を過ごせる環境づくりに努め、安全対策や教育相談体制の構築に向けての対策にも積極的に着手した。

## 次年度に向けて

学校を取り巻く社会状況や自然環境は急激に変化している。これからの時代に対応し、より信頼される学校を創るためにも、新たな教育課程編成を行う必要があると考えている。今後は、大学や地教委、民間企業、保護者との連携や交流の機会をより多く設定しながら、地域から愛され、生徒が夢をもって過ごせる学校にしていきたい。